HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期マルクス研究の特集にあたって
Citation	社会教育研究, 6, 1-2
Issue Date	1985-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28443
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P1-2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜巻頭言＞

－初期マルクス研究の特集にあたって－

今回の『社会教育研究』は，初期マルクス研究の特集号である。この特集が組まれるにあたっては，社会教育研究室が中心となって行なっている大学院ゼミナール『マルクス主義古典研究ゼミ』が直接の契機となっている。このゼミは，当初，『資本論』にはじまり，これに数年を費したのち，ひきつづき初期マルクスの研究に入って現在継続中である。初期マルクスに入ってからこれまでテキストとして取上げてきた主な文献は，マルクス『経済学・哲学草稿』,『経済学ノート』，エンゲルス『国民経済学批判大綱』，マルクス・エンゲルス『聖家族』,マルクス『フオイエルバッハにかんするテーゼ』，マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』，マルクス『哲学の貧困』，マルクス・エンゲルス『共産堂宣言』，などであり，合わせてそれらに関連するマルクス・エンゲルスの著作，初期マルクス研究にかかわる諸著作を検討の対象としてきた。そして，このゼミとしてはひきつづきマルクス『経済学批判要綱』に入る予定である。それに先だち，今回，初期マルクス（年代的に幅があるが）に関する共同の研究討論の一端を中間的に発表することとした次第である。

『資本論』から出発したこのゼミがそのあとで初期マルクスにたちかえるにあたっては，われわれなりの期待がこめられていた。そのことについて語ることは，「いま，なぜ初期マルクスか」ということをわれわれなりに意義づけることに結びつく。

『資本論』から初期マルクスへ，それは『資本論』に凝集されたマルクス経済学を継承し，それを現代における真の科学的経済学として発展させるためにも，その哲学的世界観としてのマルクス主義の形成にたちかえることが必須の研究の道筋となったことに基いている。さらにマルクス経済学を，他の諸科学（とりわけ社会科学）に対する中枢的学問領域として創造的に継承・発展させるためにも初期マルクス研究は必須の道程であると考える。

マルクス主義の三つの源泉，ドイツの観念論哲学，イギリスの古典派経済学，フランスの社会主義思想に対するマルクス・エンゲルスの生涯をかけた批判・継承・発展の中で，マルクス主義として壮大な対系化がなされ，それを基軸に経済学をはじめとする諸科学の創造，発展がなされたことは，思想・科学の発展にとって最上の成果の一つであったということができる。初期マルクスの諸作品は，まさに，このマルクス主義の形成と躍動的な発展の時期における理論と実践の所産である。

古典，それは，それに接する者に対していつも新鮮な感動を与え，たえず読者の問題意識や疑問にこたえることを通して，その長い生命力を保ち続けてきている人類の文化遺産であるといえるが，それにとどまらず，古典は読者に対してその創造的な継承・発展を要求する。初期マルクスの諸作品もそのようなものとして現代に生き続けわれわれ読者に訴えかけており，その意味では，現代においてもなおマル

クス主義発展の宝庫である。

最近，マルクス離れ，という言葉をしばしば耳にし，げんにそれを実感せずにはおれない状況のあることもたしかである（この現象はマルクス主義にかぎらず，ひろくみられる古典離れといった方がよいかも知れないが）。しかし，それは人類の文化遺産を現代において継承・発展させる任務を放棄し，みずからの問題意識の低さを露呈することになっていないであろうか。

最近，教育科学の研究においても，マルクス主義と決別し，それとは異る概念，理論の中に新しい発展の方向を探ろうとする傾向もみられるが，その中には，たんにマルクス主義との決別にとどまらずその内容・思想を意図的に歪曲しているものも少なくない。それらの批判・克服も含めて，いま，必要なことは，かつてマルクス・エンゲルスが身をもって実践したように，諸科学の成果に対する透徹した批判と継承である。

われわれは，このことを教育科学において目指し，継承・発展の対象として初期マルクスを重点に設定してきた。もとより，初期マルクス研究といっても，それ自体を主たる研究対象とする専門研究ではなく，われわれが教育科学の諸領域で直面している研究課題とのかかわりにおける初期マルクス研究であり，その意味では初期マルクスの教育学的研究である。

われわれ執筆者の一人ひとりがみずからの研究課題を発展させるうえで必要な階梯として行なっている初期マルクスの教育学的研究が，マルクス主義研究としてどのような意義を有するかということは，読者の判断に委ねるほかはないが，今後のわれわれ自身の研究の糧とするうえでも，大方の忌憚のないご批判をお願いする次第である。合わせて，それぞれの論文の中で提示された論点については，今後，教育学研究の諸領域でさらに発展させたいと考えている。

北海道大学教育学部
社会教育研究室
山田定市